

# 硝子の猫

作・こさへあきひろ

【登場人物】

織田 祐介 …… 高校3年生。弓道部。

藤山 朝実 …… 高校3年生。

橋本 ふみか …… 朝実の友達。弓道部。

五十嵐 達也 …… 祐介の友達。弓道部。

織田 聡 …… 祐介の兄。ボクサー。

地方都市のコーヒーショップのチェーン店。

高校の夏の制服姿の祐介と朝実が現れる。

朝実は髪を後ろでしばっている。

二人ともカバンを持ち、祐介はコーヒーカップを2つ持っている。

祐介 (空いている席を見つけて) あ、じゃああの、そこで、

朝実 あ、はい。

祐介と朝実は座りはじめ、祐介はカップをテーブルに置く。

1つは朝実が座ろうとしている席の方へ。

朝実 あ、ありがとうございます。

祐介 ああいえ。

座ったあと、少し沈黙があつて。

祐介 あ、どうぞ。飲んでください。

朝実 あ、はい。

朝実は返事したものの飲まない。少し沈黙。

祐介は朝実が飲まないのを見て、自分が先に飲むことにする。

祐介が飲んだのを見て、遠慮がちに朝実も飲み始める。

また少し沈黙。

祐介 これ、ちよつと思つてたのと違いました。

朝実 え？

祐介 ラテってあの、クリームみたいなやつに、チョコみみたいなやつかかってるやつかなって、

朝実 モカ、ですか？

祐介 あ、モカ……、ああ、ラテじゃなくて、

朝実 写真載ってましたよ、

祐介 あ、なんかよくわかってなくて、え、ラテって？

朝実 ラテは、ミルク入ってるだけです、

祐介 あ、じゃあコーヒー牛乳か、コーヒー牛乳っていうとなんか、変ですかね、

少し沈黙。

祐介、もう一口飲んで。

祐介 普通のコーヒー頼んだんですね、普通ってええと、ドリッ

プ？ ですか？ 女子って甘いもんが好きなのかなって、

朝実 あ、好きなんですけど、ちよつと、

祐介 あ、ダイエット中とか、あ、すみません、

朝実 ……。

祐介 あの、名前……、

朝実 あ、

祐介 あ、ええと、織田です。織田、祐介。

朝実 オダくん……、

祐介 あ、織田くんでも、祐介くんでも、あ、祐介でも、あの、だ

いたいクラスのやつからは祐介って呼ばれてるんで、

朝実 あ、はい、……えつと、藤山です。

祐介 フジヤマさん、

朝実 フジヤマってあの、富士山じゃなくて、

祐介 ああ、

朝実 佐藤の「藤」に、山で、フジヤマ、

祐介 あ、ああああ、はい、最初からそう思っていました。

少し沈黙。

祐介 下の名前は、

朝実 あ、朝実です。

祐介 藤山アサミさん。

朝実 はい。

祐介 じゃあ、あの、……藤山さんって呼びます、

朝実 はい。

少し沈黙。

朝実、カップを手に取ろうとするが、やめて、

朝実 あの、やっぱりお金（財布を取り出そうとしながら）、

祐介 ああいや、こつちから誘ったんで、ほんと、遠慮しないで、

飲んで大丈夫ですから、

少し沈黙。

朝実 びっくりしました？ さつき。

祐介 ああ、びっくりっていうか、まあ、ちよつと、びっくりしました。だってそりや、うちの高校の制服着てる人が、飛び降りようとしてるから。

朝実 ま、あの、飛び降りる気はなかったんですけど。

祐介 でも、橋の柵乗り越えてたから、

朝実 あ、最近よくやってるんです、

祐介 ……なんで？

朝実 ……（首を軽くかしげて）なんとなく？

少し沈黙。

朝実 あ、おかしいですよ、すみません。

朝実、コーヒーを飲む。

祐介 いや、ありだと思いません、全然。

朝実 あ、でも、落ちたら死ぬかなとか、考えますけど。

少し沈黙。

祐介 ……藤山さん、何年生ですか？ あ、僕、3年なんですけど。

朝実 あ、私んです。あの、たまに、廊下ですれ違ってたと思います。

祐介 あれ、あ、そう言われてみれば、あ、すみません、僕、あんま人の顔覚えられなくて。……あ、なんか、あれっすよね、夏休

みも終わって。受験勉強とか、僕もやりたくないんですけど、でもやんなきゃいけないし、死にてー、みたいな。

朝実 （伏し目がちに少し困ったような笑顔）

祐介 ……あ、何組ですか、僕、3組です。

朝実 5組です。

祐介 あ、橋本ふみかかってやついるでしょ。あのちっちゃいやつ。部活同じなんですよ。弓道部で。あ、もう引退したんですけど。

バカでしょあいつ。この前、なんかパニックになって、どうした？ つかきたら、「メガネないメガネない」って、あいつ、メガネかけながら言ってるんですよ。バカなんですよ。

朝実 あ、親友です、ふみか。

祐介 あ、なんかすみません。

朝実 いや、でもあいつバカなんで、（少し笑う）

祐介 （一緒に笑って）あ、ですよ、あいつね、

朝実 （少し笑いながら）この前、足痛い足痛い、足大きくなったかもしれないっていうから、見てみたら、靴、逆に履いてるんですよ。

祐介 そう、そういうやつなんですよあいつ。

二人、一緒に笑っている。

祐介 そういう顔の方がいいっすよ、

朝実、笑ってしまったっている自分に気づき、また伏し目がちに少し困ったような笑顔。その後、腕時計を見て、

朝実 あ、すみません、もう。

祐介 ああ。はい。

朝実 ……今日は、ありがとうございます。なんか、あんまりいいことなかったんですけど、今日は、ちょっといい日でした。

祐介 僕も、あんまりいいことなかったけど、今日はちょっといい日でした。

日でした。

朝実 ……やっぱりお金、

祐介 いやあの、あ、じゃあ今度なんかおごってください、それで、

ね。

朝実 わかりました。

祐介 だから、また、会いましょうよ。

朝実 ……はい、ぜひ。

祐介 あ、家どっちですか、

朝実 えっと、こっちの、北？ 北ですか？ あっち。

祐介 川の、どっち側ですか、こっちか、あっちか、

朝実 あ、あっちです、

祐介 あ、じゃあ、僕もあっちなんで、途中まで、

朝実 あ、そうですね、はい。

2

祐介の部屋。

祐介と、同じ弓道部だった達也、ふみかがいる。

達也 世の中はさ、男女平等男女平等って言うじゃない。でも俺現

実はそうじゃないなって思うわけ。デートでき、男がおごるかおごらないか問題があるじゃない。

ふみか あたしおごってほしい。

達也 黙って。

ふみか (寝転がって) わーい。

達也 でも俺、あの問いがそもそもおかしいと思うわけ。なんで男

がおごるか、割り勘かの二択なわけ？ 当然女がおごるっていう

選択肢もありうるわけじゃん。平等ならばね。でもそういう質問

するときはおごってほしいですか。割り勘でいいですか？ あ

たし絶対おごってほしいー、あたしは全然割り勘でいいー。しか

もその割り勘でいいって言うやつ、なんか若干偉そうじゃん。い

やいやいや、平等だったらむしろそれが当たり前だろ。

祐介 どんだけ目の敵にしてんだよ。

達也 じゃあ例えばさ、俺とふみかがデート行くとするじゃん。

ふみか 行かない。

達也 うるさい。

ふみか うるさいです。

達也 じゃあ例えばハンバーガー食いにいきます。

ふみか えー？ もっといいとこ連れてけよ。

達也 お前ハンバーガー大好きだろ。

ふみか ハンバーガー大好きー。

達也 で、なんかセット頼んでさ、一人600円かかりました。で、

そのときに俺がさ、ねえ、割り勘にする？ それともおごってく

れる？ ってきいたらどう思う？

ふみか 百回死ねって思う。

達也 うん、それは言い過ぎだけどさ。でもやっぱそう思うわけじゃん。

ふみか 思うねー。

達也 じゃあ、ねえ割り勘にする？ それともおごろつか？ っ てきいたらどう思う？

ふみか 質問する前におこれよって思う。

達也 ほらこれだよ。女はさ、心のどつかで自分はおごられて当然だと思ってるわけ。

ふみか えだってデートでしょ。デートだったらそうでしょ。これが例えば放課後にどつかで食べようぜーみたいな話だったらこれはもう当然割り勘だよ。でも違うじゃん。デートじゃん。

達也 なんだよそのデート理論。

ふみか デートってなったら、おしやれするじゃん。髪とかちよつと整えるじゃん。着ていく服で2時間くらい迷うじゃん。自分のベストな状態で会いにくわけじゃん。でもそっちはさ、朝起きて寝ぐせボサボサで、一番取りやすいところにある服テキトーに着てくるじゃん。だからその女の苦労と男がおごってくれるっていうので釣り合いとれてるじゃん。

達也 はーじゃあ言っときますけど、女はカワイイ状態で来たらそれでオッケーかもしれないけど、こっちは色々楽しませるプランとか考えますから。よし、デート楽しませてもらおうっ。みたいな態度じゃん女は。男は、あの手この手で女を楽しませるために必死になって、プランとか練ってきますから。今相手が楽しんでるかどうかとかかなり気にして微妙に軌道修正しようとしたりしますからあ。

ふみか そんなのそっちが勝手にやってるだけじゃん。デートと

かこっちで勝手に楽しみますから。

達也 はーじゃあ、服で2時間悩むのとかもそっちが勝手にやってるだけじゃん。全然取りやすいところにある服着てくればいいじゃん。

ふみか じゃあ全身ジャージです。

達也 じゃあ俺も全身ジャージです。

ふみか じゃあもうドタキャンします。

達也 家行きまーす。

ふみか くんなや。

達也 ピンポンピンポンピンポン、橋本さん、いるんでしょう。橋本さーん。

ふみか 居留守です。

達也 ガチャ。失礼しまーす。おうちデートです。

ふみか あがってくんなよ。

達也 DVDみまーす。

ふみか テレビのコンセント抜きまーす。

達也 コンセント刺しまーす。

ふみか ブレーカー落としまーす。

達也 じゃあ充電してあるパソコンで見まーす。『スター・ウォーズ』見まーす。

ふみか はーエピソードなんぼですかー。

達也 エピソード3です。

ふみか はい天才。大画面がいい。テレビでみよー。

達也 残念ブレーカー落としました。

ふみか じゃあまたブレーカーあげまーす。

達也 じゃあテレビで見まーす。

ふみか うわーおもしれー。何回見てもおもしれー。

達也 エピソード5もいんだけどねー。

ふみか ……うん、(このデート) 悪くないね。

達也 だろ？

祐介 ……え、なにこの茶番。

ふみか 『スター・ウォーズ』出してくるのはずるいよね。

達也 やっぱずるいかなあ。

祐介 え、あのさ、二人はそもそもデートってものをしたことがあるの？

ふみか・達也 一回もない。

祐介 なんなんだよこの話。

達也 モテないやつはさ、こうやっっているいろいろ妄想してき、生きていくんだよ。

ふみか 服で悩んだこととかないな。一番とりやすいところに

ある服着るもんなー。

達也 だからモテないんだよ。

ふみか ま、いつか。

二人笑う。

ふみか ……何しに来たんだっけ。

祐介 受験勉強。

ふみか 嘘だ。

祐介 ふみかが言ったんじゃない。一人じゃ勉強できないから三人でしようって。

ふみか それがこのザマだ。

達也 テスト前に部屋の掃除しちゃうってよく言うじゃん。

ふみか わかる。

達也 俺、この前気づいたら3時間くらいカッターで鉛筆削ってた。3時間も削っていると、新品の鉛筆が跡形もなくなることがわかった。

ふみか ノーベル賞。

達也 なんの賞？

ふみか ノーベル…鉛筆跡形もなくなったで賞。

二人、こらえながら爆笑。

達也 くだらなさ過ぎる…もつと面白いこと言えよ…。

ふみか 頭悪いからこれが限界…。

ふみか、笑いながら祐介に頭突き。

祐介 いてーよ。

二人、少しして笑い終わって。

ふみか ……不毛だ。

達也 あーポテチ食いながらコーラ飲みてー。

ふみか それだな。

祐介 あ、あつたと思っただけど、持ってくる？

達也 神かよ。  
ふみか テイクミー・ポテチ・アンドコーラ。

達也 お、英語満点。

二人、しょうもなさすぎて爆笑。

祐介 お前らせめてノート開いとけよ。

達也 あ、祐介さあ。

祐介 ん？

達也 いや、あとで話すわ。

祐介 あそう……あ、ふみかさ、メガネやめた？

ふみか は？ 今更じゃない？ 朝からメガネやめてたし。コン

タクトデビューしたし。

達也 そういえばメガネかけてないじゃん。失くしたの？

ふみか 失くしてねーし。家にあるし。

祐介 メガネはずしたら実は美人みたいなのあるけど、それでも

ないね。

ふみか すべての「それでもないメガネ女子」に謝れ。

祐介 ごめんな西郷隆盛。

達也 日本史満点。

祐介は去っていく。

ふみか ……勉強するか。

達也 うん。

ふみか、カバンからノートや問題集を出す。

達也は出さない。

ふみか 今日、なんか忘れてる気がすんだよなあ。

達也 なに？

ふみか わかんない。いつか。

達也 あっそ。

ふみか (勉強の準備をしている)

達也 ……ふみかっさあ。

ふみか (準備しながら) なに？

達也 ちよつと、いつきこうかなって思ってたんだけど。

ふみか うん。

達也 ふみかっさあ、祐介のこと好き？

ふみか お……あー、……んん……。

達也 見てりやわかるよ。

ふみか 嘘でしょ。

達也 お前何かと祐介の家来たがるじゃん。

ふみか ほんと？

達也 今日だってそうじゃん。

ふみか あー……それはでも違うよ。居心地いいから。

達也 祐介といるのが？

ふみか ……うんだから、好きって、そういうあれじゃないよ。

達也 (ノートや問題集を出し始める)

ふみか いやほんと。

達也 この前さ、祐介が女子と二人で歩いてんの見たよ。

ふみか ……え、弓道部の？

達也 いや、俺は知らない人だったけど、でも制服はうちの高校っぽかったよ。



ふみか えー……。あ、ヤバイ、勉強する気なくなった。

達也 やっぱ好きなんじゃん。

ふみか いやでもそういうのっていうかあ……。

達也 彼女だったらどうする？

ふみか ……いやでもあたしは、祐介と一番仲いい女子だっていう自負があるから。

達也 そんなん仲いいとか関係ないじゃん彼女は。

ふみか え。

達也 なにその目。

ふみか 一番仲のいい人と付き合うもんじゃないの。この世界のルールってそうじゃないの。

達也 それはそうとも限らないじゃん。

ふみか 嘘だ。人類って仲良くない人と付き合うもんなの？

達也 それはだって違う要素があるじゃん。

ふみか えーなに。

達也 かわいさとか。エロさとか。

ふみか (床に大の字で寝て) ……殺せ。あたしを殺してくれ。

達也 そのコちよつとかわいかったからなあ。

ふみか はーどっこいしよーどっこいしよー。

達也 ……なにそれどういう気持ち？

ふみか どうでもよくなった気持ち。どっこいしよーどっこいしよー。

達也 あ、ソーラン節だったんだそれ。

祐介が戻ってくる。コーラだけ持ってる。

祐介 (寝ているふみかを見て) え、超やる気ねえじゃん。

ふみか やーれんソーランソーランソーランソーランはいはい。

祐介 コーラかけるよ。

ふみか 本望だ。

祐介 (無視する) ポテチなかったわ。

達也 マジで、じゃあピザは？

祐介 ねえよ。

達也 じゃあコーラだけで我慢するかあ。

達也がコーラをコップに注ぎ飲む途中で、ふみかは祐介を何回か殴る。

祐介 いった。は？ 痛いんだけど。

達也 (飲み終わって) 祐介さ、この前一緒に歩いてた女子、誰？

祐介 え？ 誰？

達也 え、俺がきいてんだけど。

祐介 えいつ？

達也 えーと待ってね……おとといの、6時くらい？ 橋のあたり。

祐介 おとといの6時？……なんでそんな時間にお前いるんだよ。

達也 突然川が見たくなるときあるじゃん。

祐介 ない。

ふみか ない。

達也 俺はなんの。

祐介 あっ、ああああ。

達也 誰だよ。

祐介 あれはでも、なんか、別になんたってことじゃないよ。  
達也 なんたってことじゃないってなんだよ、誰だよ。

祐介 いや、なんか偶然、あれだっただけで、

ふみか (突然起き上がって) あつ。

達也 なに？

ふみか 誕生日じゃん。

祐介 おめでとー。(拍手)

ふみか あたしのじゃなくて。あーしまった。

達也 なになに？

ふみか 今日お母さんの誕生日でケーキ予約してたんだ、あーや

ばい、帰る、お母さん祝う。お母さん泣いちゃう。(勉強道具を片

付け始める)

祐介 おめでとーって伝えといて。

達也 あ、じゃあ俺も。

ふみか 誰だよお前ら。

達也 またあしたー。

ふみか (帰ろうとして) あれ？ あれ？ え？ あれ？ あたしメ

ガネどこに置いた？

祐介 コンタクトだろ。

ふみか あ、死にた。実家に帰ります。

達也 もとから実家だろ。

ふみか さよならー。(なぜか転ぶ) あーもうやだ、ばいばい！

達也 ばいばい。

祐介 ばいばい。

ふみかは去っていく。

祐介 なんか今日、いつにも増してバカっぽかったな。

達也 いつもあれくらいだろ。

祐介 そっか。

達也 え、で、誰なの？

祐介 いや別にほんとになんにもないよ。

達也 なんでそんなに言い渋る？ ってことはやっぱなんか、

祐介 いやいやほんとに、なんか、たまたま会って、で、なんか、

ちよつと喋ったりして、帰る方向一緒だったから、途中まで歩い

て、みたいな感じ。

達也 えそのたまたま会うってなに？ え知り合いだったの？

祐介 いや全然知り合いじゃなかったけど。

達也 知り合いじゃない人とたまたま会うっていう意味がわかん

ないんだけど。

祐介 いやーん、なんて説明したらいいかなあ。

達也 え、じゃあ名前教えてよ名前。うちの高校でしょ。

祐介 ええと……藤山さん、だね。

達也 フジヤマって、(山のジエスチャーをして) FUJIYAMA?

祐介 じゃなくて、佐藤の「藤」に山で藤山。

達也 へー、藤山なに？

祐介 藤山朝実さん。

達也 アサミちゃんか、良い名前だね。

祐介 アサミちゃんとか言うなよ。

達也 ちよつとかわいかったしよ。

祐介 ああまあ、そうかな。

達也 やるなー。

祐介 でも俺、なんかきいたことある名前のような気がしてて。  
達也 あれじゃない？ 3年？

祐介 うん。

達也 なんか、テストの順位とか出るじゃん、それじゃない？

祐介 いや、全然学校じゃない、どっかで。

ドアをノックする音。

祐介 はい。

聡の声 入っいいい？

祐介 あ、どうぞー。

祐介の兄・聡が入ってくる。

少し片足を引きずっているように見える。

軽く右腕を握ったり開いたりしている。

聡 (達也に) あ、どうもどうも、今日も来てたんだね。

達也 お邪魔してます。

聡 あのさ、こつちにあれきてない？「ウハウハハーレム大作戦」。

祐介 ないしタイトルしようもな。

聡 そういうしようもないタイトルのが好きなんだよねー。

祐介 そつちの部屋にないの？

聡 ないから来たんだよ。まずいなー、母さんにだけは見つかりた  
くないからなあ。

達也 (聡が足を引きずっているのが気になっていて) あの、……足、ど  
うかしたんですか。

聡 ん、あーそうなんだよちよつとね、  
達也 ケガですか？

聡 ケガっていうか、後遺症？ ちよつといろいろあってね、右半  
身がちよつとしびれてるんだよね。

達也 え、大丈夫ですか。

聡 まあ生活には大した支障はないからね。(祐介に) ちよつと捜し  
ていい？

祐介 「大作戦」？

聡 うん。

祐介 ま、いいけど、ないよだぶん。

聡 まあ一応、なんかに紛れてるかもしれないからさ。

聡、捜し始める。

達也 (祐介に) お兄さんボクシングしてるんじゃないっけ。

祐介 ああ、

聡 そうなんだよ。俺これでも一応プロボクサーでき、プロってい  
つてもあれだよ、別にボクシングで食えてるとかじゃなくて、プ  
ロ試験つてのがあって、それに受ければ一応誰でもプロボクサ  
ー名乗れるんだけどさ。まあでもけっこう期待の若手とか言わ  
れてて、それなりに注目とか、一応されてたんだけど。まあ、ち  
よつとこれじゃあねえ……試しに、ちよつとやってみたりした  
んだけど、もう前みたいには全然、とっさに動けなくなっちゃっ  
て、

達也 ……。

聡 けっこう、ボクシング一筋みたいなどこあってさあ、だから、

なんか最近困っちゃってさあ。トレーニングして、どんどん強くなって、もちろん途中で挫折なんかもあったりしてさ、でも俺、そういうの打たれ強いし、けっこう根性あるから、そういうのも乗り越えてさ、将来的には日本チャンピオンになってさ、世界に行ってさ、もちろんそこで戦うやつらはめっちゃくちゃ強いんだけど、でも俺は勝つんだよ。世界チャンピオンになってさ。最強の挑戦者っていわれるやつがきても、防衛してさ。やっぱ俺最強だしさ。なんてさ、なんかそんなこと考えてたからさ、急にそれがなしになっちゃって、なんかなににしたいかわかんなくなっちゃってさ。ボクサーになるって思ってたからさ、勉強もロクにしてこなかったし、人ともそんなにうまく喋れないしさ。なんか、困っちゃうよねー、はは、

そう言いながらも、聡は捜している。

祐介 あ。

達也 なに？

祐介 兄貴さ、

聡 ん？

祐介 兄貴が助けたって言ってた人、なんていったっけ？

聡 ん？ ああ。フジヤマさん？

祐介 ……。

聡 (祐介を見て) なんかあった？

祐介 あ、ううん、なんだったかなと思って。

聡 (捜す作業に戻って) ちよつとかかわいい感じの女の人だったよ。

祐介 そうなんだ。

聡 ……ダメだ、やっぱねえわ。やっぱ俺の部屋かなあ、早く見つけないと延滞かかっちゃうしなあ。(達也に) あ、どうもお騒がせしました。ごゆっくりー。

聡、去っていく。

祐介、寝転がり、天井を見ながら息を吐く。

祐介 藤山さんの話、他の人には言わないでお願いしてもらっていい？

達也 ……うんまあうん。

祐介 ふみか、親友みたいなんだよ。

達也 えマジ？ え、じゃあふみかのこと知ってたんだ。

祐介 うん。ちよつと、いろいろあるから。

達也 うん、ふみかには黙っとくわ。

祐介、コーラをそそいで飲む。

祐介 ……勉強するか。

達也 うん。

勉強の準備をし始める二人。

ファストフード店のカウンター席。

制服姿の朝実とふみかが座っている。

朝実の前には飲み物のカップ、ふみかの前には山盛りのポテト。

ふみかはポテトを食べている。

ふみか　ほんと、誰なんだよポテト開発したやつ。うめえわ。ノーベル賞もんだわ。崇めたいわほんと。うめえー、無限に食えるなこれ。信じらんないわ。だあー、受験勉強飽きた。ポテトに囲まれて過ごしたい。そうか、ポテト農家か。ポテト農家になれば受験勉強しなくて済むのか。よーし、受験勉強やめてポテト農家になろーっと。うめえ、ポテトうめえな！

朝実　情緒不安定か。

ふみか　だってさー、こんな青春真っ盛りな時期に勉強とか意味わかんないじゃん。うめえな。

朝実　大学行かなきゃいいじゃん。

ふみか　ポテト農家？

朝実　ポテト農家かはわかんないけど。

ふみか　だってお母さんが行けって言うんだもん。でも大学生とかウェイウェイ言ってるバカじゃん。

朝実　偏見。

ふみか　っつーか行きたい大学もないしなあ。でも働くのもなんか嫌だし。お嫁さんになりたいなあ。ポテト農家のお嫁さんかなあ。

朝実　農家も大変だつてきくよ。

ふみか　この世に大変じゃないものなんてないじゃん。愛があるかどうかじゃん。あたしはポテト愛してるから、めっちゃ種まく

し、めっちゃ水とか肥料とかあげるし、めっちゃ収穫するもん。そして、めっちゃ料理してめっちゃ食べるもん。マッシュポテトをおかずにフライドポテト食べるもん。ポテトサラダも添えるし、おやつにはポテチ食べるもん。うめえな！

朝実　太るよ。

ふみか　ポテト食べて太るんだったらオッケー。

朝実　じゃあもうポテト農家でオッケーだわ。

ふみか　（窓の外に猫が見えて）あ、猫だ、ネコー。（手を振る）

朝実　黒猫って不吉って言わない？

ふみか　あー猫になりたい。「私は猫になりたい」って映画ありそうだよ。

朝実　ない。

ふみか　猫って自由じゃん？　勉強しなくていいし。私は猫になりたい。

朝実　でも、ぱつと見自由に見えるけどさ、案外社会性が必要だったりするらしいよ。自分の子供を敵から守ったり、食べ物探せなかったら死んじゃったりもするし。私たちが思ってるより、猫って大変だつて、なんか書いてたよ。あと、あれ寂しいじゃん、死にそうなときに、人の前から姿消すとか……、

ふみか　あ、じゃあダメだ。あたしは愛する夫と家族たちに囲まれて死にたいから。

朝実　……。

ふみか、朝実をじつと見ている。

朝実　……なに？

ふみか あたしなんかした？

朝実 なんて？

ふみか なんか、なんだろう……顔が、変。

朝実 は？ 失礼。

ふみか なんか遠慮してる？ っていうか、なんか、ずっとそう

だよ、夏休み明けから。

朝実 ……。

ふみか ようよう。あたしたち親友だろ。知ってると思うけど案外

私ビビリだから、ずっと朝実になんかあったのかきいていいの

かな、つて迷いながらポテトの話してたんだぜ。そんな風に見え

なかつたと思うけどな。

朝実 (なにかためらっている様子)

ふみか なあ、吐いて楽になれよ。お前がやったんだろ？ ほら、

ポテト食うか？ (ポテトを差し出す)

朝実 いらない。

ふみか (差し出したポテトを食べる) 言わないとお腹のお肉触るよ。

朝実 ……。

ふみか あーあ、朝実のこと親友だと思ってたのになあー。

朝実 ……あのね、

ふみか よしきた、かもん。

朝実 うちの学年にね、うーんと、ある人がいて、

ふみか お、いいよいいよ。

朝実 あ、名前なんて言うんだろうなああって、でも、急に、名前な

んですかかってきくのも変だしって……で、この前、その人に声か

けられて、それで……二人で、話した。

ふみか (朝実のお腹をつまむ)

朝実 腹の肉つまむなや。

ふみか なにそれいい話じゃん。100いいねつけちゃう。で付き

合ったの？

朝実 いや早いから。

ふみか えーどんな人どんな人、イケメン？ 私3年生のイケメ

ンだいたい把握してるよ。

朝実 あー、っていうか、ふみかと同じ部活だった。弓道部。

ふみか ……マジ？ なんだじゃあ言ってくれば全然紹介でき

たのに。

朝実 いや、でもその人弓道部だつて知らなかつたし。

ふみか えー誰かなあ、同じ学年の弓道部男子って言ったらあい

つかあいつかあいつかあいつかあいつかあいつかあいつかあいつか

とかあ。

朝実 具体的に思い浮かべんのやめてよ。

ふみか だれだれ？ テルミーテルミー。

朝実 ーんと、オダ、くん、つて人。

ふみか ……。

朝実 (急に元気なくなったふみかに) え、なに？

ふみか ……。(機械の電源が切れたかのように一切動かない)

朝実 え、生きてる？ ふみか？

ふみか ……(生き返って独り言のように) あ、そっか、朝実だったん

だ、

朝実 え、なに？

ふみか ううん。でも……ま、あいつそんない奴じゃないよ。

朝実 え、そう？

ふみか だつてすごいあたしのことバカにしてくるし。

朝実 それはふみかがバカだからじゃん。

ふみか バカにバカって言うの失礼じゃん。

朝実 バカなのは認めるんだ。

ふみか 世界史、マークシートで0点とったからなあ。

朝実 逆に天才だよな。

ふみか あーあ、全部同じ番号塗りつぶしとけば20点くらいはとれたのになー。

ふみか、ポテトを食べる。

ふみか ……どうすんの？

朝実 なに？

ふみか 付き合いたいの？

朝実 ……。

ふみか あいつ彼女いるよ。

朝実 ……。

ふみか 嘘。いないよ。

朝実 やめてよ。

ふみか (ポテトを食べる)

朝実 でも、今、彼女いるって言われて、一瞬安心した。

ふみか (ポテトを食べている)

朝実 どうしていいかわかんないよ。

ふみか 女子高生かお前。

朝実 女子高生だよ。

ふみか そんなにとつと白黒つけなければいいじゃん。好きです、付き合ってください。ごめんなさい。おわり。

朝実 なんで失敗してんの。

ふみか ま、次があるよ。

朝実 ……。

ふみか あれ、落ち込んだ？ めんごめんご。

朝実 ダメなんだ、私、

ふみか 頭が？

朝実 誰かにこういう気持ちをもつって、ダメだよ、

ふみか ジェーポップか。

朝実 夏休みにね、(と言ったきり黙る)

ふみか ？

朝実 ……私、ひとの人生壊した…。

ふみか ……。

朝実 なんつって。ごめん、今のなし。今日の話、全部きかなかつたことにして。(飲み物を飲み切って帰ろうとする)

ふみか ちよい。

朝実 ……。

ふみか (朝実を見ている)

朝実 ごめん。またね。

朝実 は去っていく。

ふみか …… (ポテトを食べる) うま。

夕方。もう少しで夜になりそうな公園。  
ベンチの上で、祐介が寝転がっている。  
スマートフォンを確認し、すぐに戻す。  
少しして、もう一度確認し、またすぐに戻す。  
寝転がって、空を見ている。

ふみかが現れる。

ふみか よ。

祐介 え。

ふみか (祐介を見ている)

祐介 ふみふみじゃん、どうしたの。

ふみか え、あたしいつかからふみふみって呼ばれるようになったの。

祐介 今日の朝、歯磨いているときに、あ、ふみふみっていいなって思ったから。今日から。

ふみか へえ、歯磨きながらあたしのこと考えてたんだ。

祐介 うん、普段は全然ふみかのこととか考えてないんだけど、今日はたまたま。

ふみか ……。

祐介 え、で、どうしたの？

ふみか え、あたしが公園に来ちゃダメなの？

祐介 いやダメなんて言っていないじゃん。

ふみか たまたま通りがかったら祐介が寝てたから。

祐介 お前家こつちじゃないじゃん。

ふみか ……嘘。

祐介 ……。

ふみか 朝実と待ち合わせしてんでしょ。

祐介 ……えなんで？

ふみか いやいいよ隠さなくて。知ってるから。

祐介 あそう。

ふみか 暑いね。9月なのに。

祐介 うん。

ふみか、祐介にジュースを投げて渡す。

ふみか 飲んでいいよ。

祐介 ありがとう。

ふみか 120円。

祐介 金とんの？

ふみか なんであたしがお前におごんの？

祐介、財布から120円出す。

ふみかは受け取るために祐介に近づいて、そのまま祐介の隣に座る。

ふみか 少女漫画が原作の映画とかやってんじゃないん。

祐介 ああ。

ふみか ああいうの観る？

祐介 観ないね。

ふみか 主演の女優がカワイイじゃん？ だいたい。

祐介 まあ、観ねえからあんまわかんないけど。

ふみか 予告編とか流れてんじゃないん。



祐介 ああまあ。

ふみか で、だいたい相手の男がイケメンなのね。だいたい演技下手なんだけど。

祐介 うん。

ふみか で、そのイケメンが齒の浮くようなセリフとか言っちゃってさ、女子がキヤ〜ってなるのね。

祐介 へー。

ふみか この話あんま興味ないね？

祐介 うん、そんなに。

ふみか なんであんなカワイイやつとイケメンばかり出てくるんだよ。説得力ないじゃん。って思わない？

祐介 だってそんなのブスなやつが出てたって観に行かないじゃん。俺はどっち道行かないけど。

ふみか ほらそれ。結局人類ってブスに興味ないんだよ。それってひどくない？ カワイイ女ってカワイイだけで得すんじゃない。

カワイイだけで色々してもらえたりするじゃん。あたしそれ、納得いかない。

祐介 でも、それは俺、筋の通ってる話だと思うけど。

ふみか なんで？

祐介 えだってカワイイってことはさ、そこに存在するだけで周りの人の気分をよくするじゃん。だから周りの人もなにかお返ししたいなって思うじゃん。

ふみか 理不尽、

祐介 でもそれってカワイイに限った話じゃなくてさ、別にかわいくななくても一緒にいて楽しい人とか、癒される人とかいるじゃん。そしたらその楽しいとか癒されたとかのお返しをしたく

なるじゃん。そういうことじゃない？

ふみか ……怒ってる？

祐介 え？ いや、全然。

ふみか あんまりあたしにいてほしくないって思ってるでしょ。

朝実と会うから。

祐介 いやそういうんじゃないよ。

ふみか 言っとくけど、あたし朝実に頼まれてきてるからね。二人きりだと緊張するからって。

祐介 あ……なんだ。そう。

ふみか ちよつと遅れるみたいだよ。道端でおばあさん助けたらそのおばあちゃんが実は宇宙人でUFOに連れていかれそうになってたんだって。

祐介 それすぐにNASAに報告しに行った方がいいよ。

少し沈黙。

祐介、ジュースを飲む。

ふみか それ、おいしい？

祐介 まあまあ。

ふみか ちよつとちようだい。

祐介 うん。

ふみか (飲む) ……うん、まあまあ。(返す)

祐介 (飲む)

ふみか うん、なんかごめんね、わけわかんない話して。

祐介 UFO？

ふみか UFOじゃなくて、なんか、かわいいのってずるいなって

思ってたさ。

祐介 え、でもふみかだっただけか、かわいいじゃん。

ふみか ……えいいよそういうの。

祐介 あれ、自分のことかわいくないと思ってる？

ふみか ……え祐介はあたしのことかわいって思ってるの。

祐介 うん。

ふみか ……はー今までそんなこと言ったことないじゃん。

祐介 言わないよ。だってお前そういうキャラじゃないじゃん。

ふみか はーなにそのキャラ？

祐介 「かわいいって言っちゃいけないキャラ」。

ふみか あたしそんなキャラになった覚えなし。

祐介 えだっただけカワイイオーラ出してないじゃん。

ふみか えなに、かわいい人ってカワイイオーラ出してんの？

祐介 出してるよ。

ふみか えなにそれどうやって出すの。誰にも教えてもらったことないんですけど。

祐介 いやふみかが出したらうざくなるからやめといた方がいいよ。

ふみか えなんで？ っていうか今のそれ悪口？

祐介 いやいや褒めてるから。

ふみか (カワイイオーラを出そうとして) あ、こんなところに四葉のクローバー。うふふ、あたしって幸せ者だな。でも、はい、あたしの幸せあげる。

祐介 うざ。

ふみか (地面に寝転がる) あー無理ー。カワイイオーラ無理ー。

祐介 いやかわいって言うても、見ようによつてはかわいいいく

らいだから。

ふみか 上げて落とすのやめて……。

祐介 でも、ふみかと一緒にいると楽しいしね。

ふみか そんなの今まで言ったことないじゃん。

祐介 だから言わねえって。

ふみか なんで？ タノシイオーラ出さないから？

祐介 いや、タノシイオーラは出てるよ。

ふみか イエーイターのしいー。

少し沈黙。祐介はジュースを飲む。

ふみか ……え、あたしなんにもお返しされてないんですけど。

祐介 えなに？

ふみか さっき、かわいい人とか楽しい人にはなにかお返しした

くなるって言うてたじゃん。

祐介 え、してるじゃん。

ふみか してもらった覚えなし。

祐介 え、例えばさ、

少し沈黙。

祐介 ……うん、してないわ。

ふみか 死刑。

祐介 え、じゃあふみかは俺と一緒にいて楽しくないの？

ふみか ……ふみふみって呼ぶんじゃないの？

祐介 ああ、リアクション薄かったからやめた。

ふみか ふみふみにしてよ。  
祐介 ああ、うん。

少し沈黙。

ふみか 朝実だったんだね、一緒に歩いてたの。  
祐介 ん？  
ふみか 達也が話してたやつ。  
祐介 あ、ああそうそう。

少し沈黙。

祐介 達也からなにかきいた？  
ふみか ？  
祐介 あ、ううん。  
ふみか ……付き合おうとか、思ってる？  
祐介 （少し笑いながら）ふみふみと？  
ふみか ……。  
祐介 藤山さんと？  
ふみか ……。  
祐介 付き合う、とか…それは、無理でしょ。  
ふみか なんて？  
祐介 んん…。  
ふみか むこうも祐介のこと好きかもしれないじゃん。  
祐介 （少し笑いながら）それはないって。  
ふみか わかんないじゃん。

少し沈黙。

祐介 俺の兄貴さ、プロボクサーなんだよ。…って言うの知ってるっけ。

ふみか うん。

祐介 それで、ボクサー仲間とキャンプ行ってくって言って、こんなカバン買っててき、あと、こんな網とか、あと炭入れるスタンドみたいなやつとか買ったみたいでさ、そういうのカバンに詰めて、笑顔で行ってくるって言ってさ。あ、俺は夏休みだったから、ずっと家にいて。で、うん、その日はなんにもしてなかったな、その日はっていうか、夏休み中、あんまりなんかしてた記憶ないな。勉強もしないで、ぼーっと。ま、父さんも母さんも夜になんないと帰ってこないし、いる日は図書館行ってくるとか言って、テキストに外ぶらついてたりして。で、電話が鳴ったんだよ。あんま電話って鳴んないんだけどウチ。で、そのときは母さんいたんだな。母さんが電話に出て、なんかの勧誘かなとか思ってたら、なんかそんな感じでもなくて、そしたら、兄貴が入院してるって。で、母さんが慌てて出てって。俺は相変わらず、家でぼーっとしてて。しばらくして電話がかかってきて、それは母さんで、兄貴、川で溺れてる女の人を助けて、兄貴、昔水泳やってたからさ、それでなんか水入っちゃったらしくて、入院するって。兄貴が家に帰ってきたときさ、こう、右手を握ったり開いたりしながらさ、ちよつと笑いながら、俺、もうボクシングできないかもしれないわって、なんか、兄貴が笑顔だからさ、俺も笑顔にしなきゃって思っで、あ、そうなんだ、ってだけ、なんか…そんな兄貴さし

おいてさ、付き合うとか付き合わないとか……ね。

ふみか ……そんなの、でも、祐介がそんな思いしてるってなった  
ら、そっちの方が兄さん困っちゃうじゃん。

祐介 ま、別に兄貴もへらへらして、気にしてないような素振りし  
てるけど。……その溺れてた女の人、

ふみか ？

祐介 ……藤山さんなんだよ。藤山朝実さん。

沈黙。

祐介 そりゃ、その人とそうなるって、それは……ねえ、

沈黙。

ふみか ……どうすんの？

祐介 ……なにを？

ふみか 全体的に。これから。

祐介 将来？

ふみか だって、勉強してないんでしょ。

祐介 してないね。

ふみか ……。

祐介 でも就職とかもさ、やりたいことわかんないし。

ふみか とりあえず大学行けばいいじゃん。

祐介 うん、まあねえ。

ふみか 一緒に行こうよ。

祐介 んん。

ふみか あたし、バカだけど一生懸命勉強してるし、祐介はちよつ  
と勉強すれば入れるよ。

少し沈黙。

ふみか ……ね、キャンプ行かない？

祐介 え？

ふみか みんなで。キャンプ行きたい。あたし毎年お母さんとキャ  
ンプ行くんだけど、今年はみんなで行こうよ。

祐介 キャンプはなあ、だって。

ふみか なに。

祐介 お前溺れても俺助けないよ。

ふみか お前溺れたらあたし助けてやるよ。

祐介 お前泳げんの？

ふみか んー、無理だわ。

朝実が現れる。制服姿。

少し離れたところで立ち止まる。

ふみか ようよう、へい、かもん、かもん、

朝実、近くまで来て、祐介立ち上がる。

朝実 (祐介に) あ、こんにちは。

祐介 あ、うん、こんにちは。

朝実 あ、すみません、あの、なんか、着替えた方がいいかな、と

か、でも、織田くん制服だったら、なんか私だけ気合入れてきたみたいなの、あ、なんか、そういうこと考えてたら時間経ってて、あ、でもなんか、そんな理由で遅れますって言うの、なんて連絡したらいいんだろかと思って、あの、あ、ふみかから、ちゃんと遅れるって、伝わって……？

祐介 あ、はい、あの、大丈夫です。ふみかの話し相手になってや  
ってたんで、全然、暇つぶせました。

ふみか あたし暇つぶしかよ。

朝実 (少し笑って) ふみかって面白いですよ。

祐介 あ、そっすね、面白いっす。

ふみか (ベンチに寝転がって) おう、エンターテナーふみかと呼べ。

祐介 ……座りたいんだけど。

ふみか つら。(降りる)

祐介 あ、どうぞ。

朝実 あ、はい。

二人、座る。

ふみか (後ろから朝実を抱きついて祐介に) てめえよ、デートで公園

ってなんなんだよ。夜景の見えるレストランとか連れてけよ。

祐介 いや、デートっていう、あれじゃないから。

朝実 あ、あの、私、公園好きなんで、

ふみか そんな奴いねえよ。

朝実 いるよ。あの、シーソーとか、乗れますし、鉄棒は、今日は  
ちよつとスカートなんであれですけど、逆上がりとか、超得意で  
す。

祐介 あ、じゃあ今度教えてください。僕、逆上がりできなくて。  
朝実 あ、じゃあ、特訓ですな、今度。

ふみか ちよつと不毛な会話してるところ失礼していい？

祐介 お前の存在の方が不毛だよ。

ふみか (雑な感じに) ソレハ勉強ニナルナ。

祐介 リアクションだんだん雑だな。

ふみか 朝実はキャンプに行くことになったよ。

朝実 え、私？

ふみか そ、来週の土曜。みんなで行くから。あたしのお母さんと  
一緒に。

朝実 なんて。

ふみか 高校生！ 最後の年！ あたしは！ 青春ぽいことを！

する！ 決まり！ お疲れ！ あとで連絡するね！ ばいばー  
い！

ふみか、去っていく。

祐介 なんなんだろう、あいつ。

朝実 あ、てか、帰っちゃった、

祐介 あ……なんか、二人、ですね、

朝実 そうですね……、

少し沈黙。

祐介 あ、なんか、すみません、レストラン、とかの方が、  
朝実 あ、いや、本当に、公園好きですから、

祐介 あ、ならよかったです。

沈黙。

祐介 あの、

と言ったきり沈黙。

朝実 え、なんですか。

祐介 最近なにかありましたか？

朝実 最近ですか、ああ、……勉強、ですかね……？

祐介 あ、すごいですね、僕、勉強もしてないんで。

朝実 大学は、

祐介 あ、うん、どうしようかと思つてて、自分のやりたいこととか、よくわからないし……藤山さんは、なにかやりたいこととかあるんですか。

朝実 やりたいこと、あー、服、とかですかね。

祐介 フク？

朝実 あの、服飾、ファッション、とか。

祐介 あ、ああ、服。あ、いいですね。じゃあそういう学校に、

朝実 ……。

祐介 あ、じゃなくて、そういうところで働く、とか、

朝実 ……。(困ったように笑っている)

祐介 あ、ごめんなさい、

朝実 ……なんか、どうしていいかわかんなくて、

少し沈黙。

祐介 あーあの、ごめんなさい、言います。

朝実 ？

祐介 つていうか、今日はこのこと話そうと思つて、呼んだんですけど。

朝実 ？

祐介 あの、織田聡って、知ってますか。

朝実 え、

朝実、なにかに気づいたように少し身構える。

祐介 織田聡、兄です、僕の、

朝実、どうしていいかわからない顔。

祐介 あの、でも違うんです。兄も、別に恨んでるとかそういうのはなくて、

朝実 (何かを言おうか考えているが言葉は出てこない)

祐介 あの、でも、僕も、それ知つたの、あの、藤山さんに声かけて、一緒に帰つた、その、次の次の日、だから、なんか、どうしていいかわかんなくて、

少し沈黙。

祐介 藤山さんと会つてから、なんか、藤山さんのこととか、今な

にしてるのかな、とか考えたり、それは悪い意味じゃなくて、ん、いい意味で、でもその、それとは違った意味で、藤山さんも僕の兄貴のこととか考えたりしてるのかなって。……でも、いんですよ、考えなくて。兄貴のこと考えるかわりに、もっと、自分の好きなこととか、服のこと？とか、そういうこと、考えてほしいんです。あと、好きな人のこととか。

朝実 ……よかったです、その話きけて。

祐介 (少し安堵したように笑う)

朝実 私もあの日から、ふとしたときに、織田くんのこととか、考えるようになって、でもそのたびに、あ、私はそういうこと考えちゃダメだなんて思って、あの人の人生奪つといて、そりゃないよって、なつてたんですけど、よかったです……これでもう、あきらめがつきます。

祐介 違いますよ。僕が言ったのはそうじゃなくて、

朝実 わかっています。でも、そういうことなんです。

祐介 うーんと……そうだ、キャンプ。キャンプ行きましょう、とりあえず、ね？ それはもう、ただ、青春しに。それくらいは、ね、いいでしょ。

朝実 ……。

沈黙が続く。

祐介はなにか話さなければと思うが、うまく言葉を思いつけない。

聡が現れる。

聡 おー祐介、あれ、なににデート？ (朝実に) あ、どうもこ

いつの兄です。え、もしかして彼女ですか、(と言って、朝実を見たことがあることに気づいてくる) あ、

朝実、頭を下げる。

聡 久しぶり、ですよね？

朝実 はい。

聡 あ、お元気ですか。

朝実 はい、おかげ様で。

聡 あ、じゃあよかったです。(祐介に) あれ？ もしかして、学校同じ？

祐介 うん、まあ。

聡 あそうなんだ。え、なにに、付き合ってるの？

祐介 いや、そういうんじゃないよ。

聡 ちよつときいてくださいよ。こいつねえ、なんか妙にモテたりするんですよ。足速かつたんですよ。小学生のときなんか、バレンタインに、こんな、二十何個とか、チョコもらっちゃって、ま、俺はなにがいいのかわんないんですけど。

朝実 ……。(まだ頭を下げている)

聡 あ、いいですよ、頭上げて。

朝実 いえ、

聡 あ、ほんとに。あれは俺が勝手にやったことですから。

朝実 ……。

聡 いやあお願いします。なんか俺、悪い人みたいになっちゃうんで。

朝実 (少し上げる)

聡 (ベンチに座って) え、二人はけっこういい感じなの？ そうい

うんじゃなくて？ 俺女の子と二人っきりで公園に来たことなんかなかったなあ。ま、公園じゃなくても行ったことなんかないけどさ、女子と二人っきりなんて。お前あれ、中学んときさ、よく遊びに来てた女の子いたじゃん。なんてったつけ、あの、かおるちゃん。かおりちゃん？ ちよっとかわいらしい子でさ、（朝実に）いたんですよ、そういう子が。あの子絶対お前のこと好きだったよな。なんなんだろうなあこの差は。お前はきつと、なんかうまいんだよな、全体的に。人との接し方とか。俺、しゃべるの苦手だからさ、女子とかの前だと、けっこう、う、あ、つてなつちやつてさ、まあでもいんだよ、俺にはボクシングがあるしさ、つて。

朝実、頭を下げる。

聡 （それを見て顔がくもる）……何言つてんだろうね俺は。いや、ごめん、どうぞ二人で、うん、また。（帰ろうとして）あ、「大作戦」あった。今、それ返しに行った帰りで……今日、冷やし中華だつて。ま、あんまり遅くならないうちに。じゃ。

聡は去っていく。

祐介 ……頭上げてくださいよ。

朝実 （少し上げる）

少し沈黙。

朝実 ごめんなさい、もう、行きますね、すみません。（行こうとする）

祐介 あの、

朝実 （立ち止まる）

祐介 キャンプ。よかったら。

朝実、軽く頭を下げて去る。

祐介はベンチに寝転がり空を見上げる。

5

夜のキャンプ地。寝転がって空を見上げている、祐介と達也、ふみか。みんな私服。

達也 （指をさして）あれが、ベガだな。

ふみか えどれ？

達也 あのめっちゃ光ってるやつだよ。

ふみか あ、へー。

達也 あの辺にわっとなってるのが、水瓶座だよ。

ふみか え？ あれ？

達也 そうそう、水瓶っぽいだろ。

ふみか あー、ああ確かに亀みたいな形してるね。

達也 ……ミズガメって亀じゃなくて瓶だからね。

ふみか え？ ……あー瓶って感じだね。



達也 で、あれがそれっぽくないけど、白鳥座ね。

ふみか どれ？

達也 あの辺にポツポツポツってあるだろ。

ふみか え？ あれ？

達也 そう。白鳥座って白鳥っぽくねえんだよ。

ふみか へー。

達也 ま、全部嘘だけだね。

ふみか 時間返せよ。

達也 なんだよ「あー瓶って感じだね」って、全然瓶っぽくねえじゃん。

ふみか 言われたらそう見えてくんじゃん。

達也 あ、あれは月だよ。

ふみか うん、それはわかる。

達也 ま、あんな星なんかよりもさ、お前の方がきれいだぜ。

ふみか は？ 星のほうがきれいだろ。

達也 そうだな。

祐介 あのさ、俺気づいたことあるんだけどさ。

達也 なに？

祐介 お前らの話って、なんにもなんねえな。

達也 今更かよ。

ふみか もっと早く気づけよ。

沈黙。

ふみか ねえ、なんにもならない話していい？

祐介 なに。

ふみか あたしと付き合ってたら付き合ってくれる？

達也 ……このタイミングじゃなくね。

ふみか は？ このタイミングじゃん。隣で星見てんじゃん。

少し沈黙。

祐介 (わざとらしくいびきをかく)

ふみか え、嘘でしょ、起きてたじゃん。

祐介 ……うん、起きてるけどさ。

少し沈黙。

祐介 ……ふみかは……違うな。

ふみか 違うってなに。

祐介 んん……だって俺たちそういうんじゃないじゃん。

ふみか これからそうなればいいじゃん。

祐介 んー……なんないかなあ、それは。

少し沈黙。

聡がやってくる。

聡 なあなあなあなあ、トイレにこんなでつかい蛾いたんだよ。こ

んなんだよこんなん。見たことあるこんなん。(手のサイズをかえながら) 普通こんなんじゃない？ こんなんだからね。

達也 あー俺行つたときも飛んでました。

聡 だってこんなん見たことある？ こんなんだよ？

達也 あれヤバイっすよね、あれ絶対将来モスラになるやつですよ。

聡 あの数？ あの数モスラになるの？ 滅ぶよ日本。

祐介 ねえ、あれ水瓶座なんだけどさ、あれ水瓶に見える？

聡 え？ ああ、……まあ言われてみれば亀みたいに見えるね。

達也 いやお兄さん、亀じゃなくて瓶です。

聡 瓶？ ああ、瓶ね、はいはい。うん、見えないこともないね。

祐介 ま、あれ水瓶座じゃないんだけどね。

聡 えウソ。だって瓶っぽいじゃん。

祐介 全然瓶っぽくないだろ。

聡 なんだよ。あ、またトイレ行くわ。

祐介 なんでだよ。

聡 さつき小便で今度は大便だよ。しかも俺頻尿だし。

祐介 はい、いってらっしゃい。

聡 いってきまーす。

聡は去る。

ふみか ……ねえ、大丈夫かな。

達也 ん？ ああ。

と言って、二人は祐介を見る。

祐介 だって、仕方ないじゃん、ちよつと言っちゃったら、すげえ行きたいって言うんだもん。パーベキューセット全部持つてけるよとか言ってるよ。

ふみか いやまあ、いいけど、ねえ。朝実が、

達也 車に乗ってるときさ、あれ絶対寝たふりしてたよね。

祐介 で俺の兄貴はひたすら喋ってるしね。

達也 でも、朝実ちゃん、それでも行くって言うってくれたんだろ。

ふみか うん、来てくれないかと思ってたけど、……でも、なんか

今日、ずつとどっかきつそうな感じしてたけど。

達也 朝実ちゃん遅くね？ 食器洗うのこんな時間かかる？

ふみか たぶん流しであたしのお母さんのトークに捕まってるわ。

基本止まんないから。

祐介 ちよつと様子見に行くかな。

達也 らっしゃい。

祐介 なに？

達也 行ってらっしゃいの「らっしゃい」だよ。

祐介 あ、はい。

ふみか 行ったら。

祐介 うん。

祐介は去る。

達也 「ミイラ取りがミイラになる」って知ってる？

ふみか うん。

達也 その可能性あるね。

ふみか お母さんのトーク強力だからなあ。

達也 ……よし、トランプでもしようか。

ふみか 二人で？

達也 三人で。お兄さんと。

ふみか 大便だよ。

達也 そんな一時間も大便してないだろ。

ふみか なにすんの。

達也 インディアンポーカー。

ふみか えなにそれ。

達也 トランプでイノシシ狩るゲームだよ。

ふみか なにそれ、誰かイノシシ役やるの？

達也 嘘だよ。

ふみか 嘘かーい。

と言いながら去っていく。

川。みんなとは少し離れたところ。

朝実が座っている。

祐介がやってくる。

祐介 ……どこにいるのかと思った。

朝実 ……。

祐介 流しにもいなかったから。

朝実 うん……。

少し沈黙。

朝実 ……あっちの方、木生えてるじゃないですか。ズーっと。あそこに入ると、二度と出てこれられないらしいんですよ。だから、

あそこには絶対入っちゃダメだって、この前キャンプに来たとき、お母さんが言ってたんです。

祐介 あ、じゃあ、危ないですね、入ったら。

少し沈黙。

祐介 ……あ、もしかして、ここですか？

朝実 ……。

祐介 全然、浅そうに見えますけどね。

朝実 急に地面なくなってる、そのまま流されて、……家族と一緒に来てて、ちよっと散歩しようと思って、一人でここまで来て、

祐介 今日、よく来られましたね、あ、そういう意味じゃなくて。

朝実 友達の家に泊まるって言ってきたんで、

祐介 あ、じゃあ、嘘つきっすね。僕も、よく嘘つくんですよ。勉強してくるって言って図書館行くんですけど、そこでただぼー

っとしてたり。

朝実 あのまま流されて、死んじゃったほうがよかったですかね、私。

祐介 ……。

朝実、靴と靴下を脱ぐ。

川に一步踏み入れる。

朝実 あのと看、こういう感じで、冷たくて気持ちいいなあって思ってた、あのと看は、もっと明るかったですけど。

朝実がもう少し歩いて行こうとすると、祐介が朝実の手をつかむ。

祐介 ……戻ってください。

祐介、朝実に促されて川から戻ってくる。

祐介 ……靴、履いてください。

朝実、靴下を履こうとするが、足が濡れているのでためらう。

祐介、首からぶら下げていたタオルで朝実の足を拭く。

朝実 ありがとうございます……。

朝実、靴下を履き、靴も履く。

祐介 あの、死ぬこと考えるなんて、変です。だって生きてるのに。

朝実 私も、自分のこと変だと思ってるんです。もつと、楽しいこ

ととか、織田くんのこととか考えて、織田くんは私のことどう思

ってるんだろうとか、そういうこと考えて、勝手にドキドキした

りして、……でも、それってダメことじゃないですか。

祐介 なんでダメなんすか。僕だって、藤山さんのこと考えたり、

藤山さんは僕のことどう思ってるんだろうとか考えて、勝手に

ドキドキしたり、しますよ。それってダメなんすか。

朝実 織田くんはいいけど、私はダメです。

祐介 そんなの、誰だからよくて、誰だからダメとか、そんなのな  
いです。

朝実、川の向こう側を見ている。

朝実 ……なにもないところに行きたいですね。

祐介 なんすかそれ。

朝実 誰も私たちのこと知らない世界です。

祐介 ああ……いつすね、それ。

少し沈黙。

祐介 え、それあの世に行きたいとかそういうことすか。

朝実 あ、そうじゃなくて。どっか、遠くに。

少し沈黙。

祐介 ……少し前に、なんのドラマか忘れたんですけど、40くら

いのスーツきた主演の俳優が、高校生たちが遊んでるのを見て

言ってたんですよ。あいつらは自由でいいなって。……でも、そ

れって間違ってますよね。お金もないし、一人じゃどこにもいけ

ないし、それに、心だつて強くないし、僕、こう見えて、けつこ

うガラスのハートですから。藤山さんだつてそうでしょ。だから

……同じなんです、僕も、藤山さんも。

少し沈黙。

祐介 行ってみませんか。あそこ。

朝実 ?

祐介 たぶん、誰もいないし、誰も来ませんよ。僕たち以外。

朝実 ……。

祐介 競争しませんか。疲れるまで走って、先に疲れた方が負け。

朝実 負けたらどうなるんですか。

祐介 勝った方の言うこときくってことにしましょうよ。

朝実 ……いいですよ。

祐介 じゃあ、位置について……よーい、ドン。

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがき

2015年から「ゆりいか演劇塾」というワークショップをやっている、その中の昔から参加してくれている人たちと作品をつくることにした。メンバーにどんな作品をやりたいかきいてみたところ、いろいろと意見が出たが、そのうちの一人が「制服を着たい」と言ったのと、「今まで見たことがないので、小佐部さんの純愛もが見たい」という意見もあったことだったので、「高校生の純愛もの」というコンセプトが決まった。僕自身は高校時代、大した青春を体験したわけでもないし、純愛もなかったので、書くのに苦労するかと思ったが、どうでもいい不毛の会話をたくさん書こうと決めたことで、思ったよりも書く作業は楽しく進んだ。

よくある純愛ラブストーリーになるのは避けたいと思って書いたが、実際どのようなものになったかは、観た人、読んだ人の判断に任せようと思う。両想いの二人がなかなか結ばれない、というのはよくあるパターンだとは思いますが、そこに恋愛に関するトラウマではなく、人生を楽しむことに対する「罪」の意識を置くことにした。罪＝過去は消えるものではない。僕の台本にしてはめずらしく善人ばかりの作品だが、被害者も加害者も（被害者・加害者という書き方は正しくないかもしれないが）あるひとつの過去に対してどのように向き合えばいいのかわからず、そこがドラマの中心になるように書いた。人間誰しも「過去のアレがなかったことになればなあ」と思うことのひとつやふたつはあると思うが、その過去にうまく付き合っていないける人もいれば、どうやって付き合っていないのかずっとわからないままの人もいる。この作品をみて、なにかヒントになる人もいるだろうし、なんの役にも立たない人も

たくさんいるだろう。結局それは自分で考えなければいけないのだ。

子供というには大人だし、大人というには子供という高校時代、自分のことを振り返ってみると、今よりもだいぶ世界は狭かったし、自分なりの価値観や個性というものもあまりあるとは思えなかった。それでもそれなりに生きていたなあと思う。お金もないし、ひとりでは遠くに行くこともできないし、家と学校だけが世界だと思ってしまっていた、それが高校時代というものだなと思った。（実際は高校生だっているんなことを自力でできるのだが、そのことに気づかなかつたり、周りの環境がそうさせないことも多い）。僕は、「高校時代に戻りたいですか」ときかれればまずノーと答える。それはやっぱり今のほうが世界も広いし楽しいから。というか高校時代に楽しい思い出もそんなにない。なのでこの作品は、こんな高校時代を過ごせたら楽しかっただろうな、という僕の想像ともいえる。祐介とふみかと達也が、祐介の家でただただ不毛な会話を繰り返しているシーン。ああいうところに僕の憧れがあるのかもしれない。あそこは書くのが楽しかった。きっとあの3人は高校を卒業しても、なにかの折に3人で会ったりして、不毛な会話を繰り返して、ケラケラ笑っているんだと思う。

さて、ここで告白しますが、僕のお気に入りのはふみふみです。親友と好きな人がかぶったときに「あいつ彼女いるよ。」とかさらつと言っちゃあたり人間を感じます。あの不毛なことばかり言うて人生楽しんでそうな彼女が告白してさらっと振られちゃうのか、かわいそうだけど愛おしいです。頑張れふみふみ。きっと将来いいことあるよ。

2017年9月22日 こさべあきひろ

劇団ゆりいか第1回公演『硝子の猫』

【キャスト】

織田 祐介	高橋寿樹
藤山 朝実	橋場美咲
橋本 ふみか	後藤夏実
五十嵐 達也	若月篤
織田 聡	中村雷太

【スタッフ】

作・演出・音響・宣伝美術　こさべあきひろ  
舞台監督　米沢春花（NPO法人コンカリーニョ）  
照明　森岡沙綺  
衣装　後藤夏実  
小道具　若月篤　中村雷太  
受付　牧野あすか　石塚可那子　松浦ひかり　中村のか　濱田さつき  
制作　野澤麻未

【日程】

2017年9月30日（土） 11時半／18時

【会場】

ターミナルプラザことにPATOS

【料金】

一般1500円　高校生以下500円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

『硝子の猫』の上演について

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合は、上演許可料は無料です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程度を上演許可料とします。脚色や潤色は自由におこなってかまいませんが、大きく変更する場合は「脚色：○○○○」など脚色者をチラシ等に表記してください。上演のお問い合わせはクラク芸術堂企画運営委員会まで。

※中高生や学生が主体の団体（部活動や演劇サークルなど）が上演する場合、上演許可の連絡をしなくてもかまいません。高校演劇の大会などでもご自由にお使いください。可能な範囲でチラシやパンフレットなどに「作・こさべあきひろ」など作者名の表記をお願いします。

【クラク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com

2017年9月27日 第1刷制作

小佐部 明広 (こさべ あきひろ)

1990年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。2011年に「劇団アトリエ」を結成し、2017年に「クラアク芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。2017年から平仮名名義「こさべあきひろ」としての執筆活動も開始。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール2015優秀賞。

クラアク芸術堂ホームページ

<http://www.clark-artcompany.com>